
ねくら

名無しの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねぐら

【Zコード】

Z7255Z

【作者名】

名無しの

【あらすじ】

夏休みが明け、様変わりしたクラスメイトと相反して、負の観念に憑かれた少年、霧崎刑は、突然襲つてくる頭痛に悩まされながら、周りと噛み合ない毎日を怠惰に過ごしていた。彼は永々とも思える時間を、自身の過去から逃げる様に、他愛も無い空想に費やしていた。文化祭が近づき、活気付くクラスであったが、相変わらず校内で嫌われている存在の少年には、居場所などあるはずも無かつた。居心地の悪さを感じた少年は、いつもの様に授業を抜け出し、下らない妄想に耽ようと古びた資料室へ向かう。そこで少年は、一人の

少女に用意され
.....。

『ねぐら』

無かつた。

僕には何もなかつた。

僕は笑わなかつた。

僕は泣かなかつた。

僕は悲しまなかつた。

僕は楽しくなかつた。

僕は嬉しくなかつた。

僕は憐れまなかつた。

僕は悔しくなかつた。

たくさん持つてないものがあつたから。

酷いことをしても。

酷いことをされても。

何も思わなかつた。

僕には表情が無い。

僕にはココロがない。

僕には何も無い。

僕は生きてるのか。

僕は死んでいるのだろう。

何も感じないから。

なにも見えないから。

ここはとても暗くて、寒い。

ここには何もないし、終わりがない。

虚しい。

何時まで経つても終わらない。
何処まで行つても終わらない。
一生続くのだろう。

僕は逃げられない。
これが僕の全てだ。

この暗闇が。

ただそれだけが。
僕は欲しい。

ココロが欲しい。

あの子の様な。

暖かくて優しい。

ココロが欲しい。

僕には無いから。

僕は持つていらないから。

だから、僕にはあの子が必要だった。

ロープ

絶望的な痛みの波は、去つていった。

だけど、未だ、耳鳴りと頭痛が酷い。

神経は鈍り、頭はまるで鉛の塊の様に重たい。

この痛みは、吐き気すら催す痛みだ。

それに、全身が、震えている。

視界は真っ暗だ。

呼吸はだいぶ落ち着いたけど、まだ荒い。

今回は、本当に、運が無かつた。

まさか、このタイミングであれが来るとは、思いもしなかった。

だから、なんの準備もしていなかつた。

それでも、この失敗は、完璧に、僕のミスだ。

全く、毎回毎回こうも失敗ばかりしているとさすがに嫌気がさしてくる。

こうまで失敗が積み重なると、もう、自分の弱さに只ただ辟易するしかない。

.....。

まあ、でも、こつやつて繰り返していれば、何時かは、成功する時が来るだろう。

今のところ、僕はそう、信じている。

「ハハハ、失敗かア、残念だつたナア」

「また、お前か

「おいオイ、または無いだ口?」

「お前は、何時も僕が失敗すると、出でくるんだな

「そうだナ、それが、俺の役目だしな」

「嫌なヤツだな」

「それもマタ、酷い言いぐさだナ」

「だつて、そうだろ、僕が失敗した時ばかり出てくるから」

「まア、そう焦るなヨ。俺としちヤ、お前が何時も失敗してくれた方が、色々と、都合がいいんだからヨ」

「いつも、そう言つたな」

「俺の立場からだと、そう言つた見解になるんだヨ……まあ、それにも、お前もなかなかに懲りないヤツだナ。先週も失敗したシ、先々週も失敗したじやねエカ。まったく、オレもつぐづくお前には手を焼かされるヨ」

「お前が、邪魔したのか？」

「ン、それは、違うナ。俺は何もしていなイ。大体、俺はよつぽどの事が無いト、何もしなイ」

「それじや、僕自身が、自分で？」

「マア、そう言つこつたナア」

「……全く、どうしようもない恥さらしだね。これじやまるで生きながらにして恥を晒している様なものじやないか」

「まア、お前には恥をさらせる程の人間関係は無いけどナア」

「……ああ、それもそうだな。僕は人間が嫌いだからね」

「才前も一応、人間だけどなア」

「ああ、そうだ、僕は人間だ。だから僕は、僕が嫌いだ」

「ハハハ、そう、それでいいんだ。俺もお前も、随分と嫌われてる存在だからナア。それが自然の成り行きつてヤツダ。俺たちハ孤独に囲まれてるからナア。全ク、嬉しいよナア」

「随分と、物寂しい人生だな」

「寂しいねエ、まア、寂しさつてもんハ、人間が怖がルもんだよナア。人間かア、人間ネえ、でもナア、俺たちにとつてはコレが普通なんだヨなア。常識つてやつダ。俺モお前モ、つまり世ノ中の一般から言つテ、アまり普通つてヤツの部類に入らねエんだヨなア。そうだナ、つまり俺たちは結構、例外的な存在つて訳ダなア。どうだア、嬉しい力？」

「…………」

「ハハハ、そんなに口口口んでもいいると、俺達もウレしいヨナあ」

「…………もつこい、もう、消えてくれ」

「マあ、やう固イ事を言つなヨ。言われなクテモ、俺ハもうすぐ消
工るんだからヨモ……なア、俺達が必要になつたら、いつでも呼ん
でクレヨ。俺はお前が得意な事は苦手だけどナア、お前の苦手な事
は大体得意だからヨオ」

「…………僕は忙しいんだ。僕は自分のやつた事の後片付けをしなくち
ゃいけないからな。後始末をしないと。だから、お前は、早く消え
るべきなんだよ」

「ハハ、後始末力、そうだよナア、後始末は面倒だよナア、何にせ
ヨ、自分のした事の始末つてモンはよオ…………ハハハ。わかつたヨ、
俺ハ、もう、消える、けどナ、…………最後に一ツ、イイか？」

「…………」

「ハハハ、お前がさア、こいつ事すんのハ、俺にとつてあんまり
メリットがねエんだけどヨオ。まア、もしもの時ハ、そん時に考え
るとして。こりヤ俺からのアドバイスだがよオ、今度同じ方法でや
るときはヨ、もつと、丈夫ナ繩、用意しとくベキだよナア」

溜め息すら出ない。

ただ僕は、暗い天井を見上げるばかりだ。

世の中に生きる事ほど辛い事はあるか？

死ぬのは一瞬で、生きるのは一生の苦しみ。

本当に？

本当にそうか？

案外、死んでしまうより、生き続ける方が楽なのかも知れない。
そうだとしたら、僕は

一般的な高校生の登校風景

ピー、ピー、ピー、ピー、ピー

鼓膜に十足で侵入していく単調で不快な電子音。

……ああ……こつもコトだ……つるさこいな……もつ少し寝かせ

………………………………………………………………

音はいよいよ僕の残りわずかとなってしまった脳みそ（蟹味噌同然）を叩き起こす程にやがましくなってきた。

……分かったよ、今日のところは僕の負けを認めよう。仕方がないので、氣急ぐ田蓋をオープンして田覚ましのスイッチを握りこぶしで叩き切る。

……また新しいの買わないと。

まったく、どうしてなのだろうか？

どうして、また、朝がくるんだ？

僕はただ、ずっと眠っていたいだけなのに。

そして、叶うならば、一度と田を覚ましたくないだけなのに、なぜ夜が終わってしまう？

まったく、嫌な朝だ。

否、それはなにも今日に限った事ではない。

一年中年中無休で平均的に僕の迎える朝は嫌な朝だ。

何が嫌か？

朝の日差しが嫌だ澄み切った空気が嫌だ聞きたくもないのに聞くえてくる鳥の呑気な鳴き声が嫌だあの意識がはつきりとしないぬるま湯に漬かっているような惚けた自分が嫌だあと人間がキラ

イだきりがない無いのでここに辺で止めておく。

詰まるところ嫌なモノは嫌って事。それが言いたかつた。

だらだらと立ち上がり、洗面所に向かう。

我が家洗面所には鏡という恐ろしい物体は、無い。

正確に言つと、前はあつたが今は無い。

高校に入った時、思春期特有の若氣の至りで木つ端のミジンコになってしまった（トンカチで叩き割つてしまつた）からだ。

あの時はアニ（仮）と初めて本氣で喧嘩したな。

あれ、初めてじゃなかつたつけ？いや、でもあれは僕が初めて

何で昔の思いでに浸つてゐる暇は、あまり無い。

顔を洗い、歯を磨き、髪型はセットのしようが無い程の簾仕様なので、適当に分けるしか施しようが無い。

朝ご飯は勿論用意されている訳が無いので、胃の中にひたすら水道水を流し込み満たし、空想でモーニングセットを作り上げ、自らの体を欺き、我慢するしかない。

パジャマ代わりのワイヤーシャツを脱ぎ捨て、パンツ一丁の僕は、ソファに無惨に脱ぎ捨てられていた制服のズボンを履き、クローゼットから新しい長袖のワイヤーシャツを取り出す。

僕はどれだけ暑くても絶対に長袖しか着ないので。と、言つのは嘘で単に半袖を持していなければ。

散らかり放題のリビングルームにはあまり座れるスペースが無い。というかこちらがどんなに座りたいと切望しても、座れない。

仕方がないのでソファ（普通一般に言つやつではない）に体育座りをして、リモコンという文明の利器を使いテレビジョンのスイッチを入れる。

我が家時代に取り残されたアナログなテレビの画面が、だんだんと人の形の像を結び始める。

何か面白いニュースはないか、と数分間色々とチャンネルを変えてみたが、一昨日に起きたお偉い人の失言を何度も同じ様なフレー

ズを用いて揚げ足を取るのに夢中な報道ばかりだ。どれもこれも似たり寄つたりの気の抜けたものばかりだ。つまり、目星しいものは……無い模様。

画面から目を離し、しばしば外の長閑な風景に目を移す。田の保養を行いつつ、いつも通り頭の中で暗闇に向かつて話しかける。

殺人事件は毎日何処かで起きているし、政治家の失言や汚職だつて最近ニュースで取り上げられる様になつた訳ではない。なにせ、僕らが生きる素晴らしいこのご時世は子が親を殺すのが珍しい事ではないのだから。僕ら視聴者も他人面で毎日毎日そんな血なまぐさい話を画面越しに見聞きしているし、僕らの感覚が麻痺するのも無理からぬことである、と思いたい。

再び画面に目を向ける。

最近逮捕された殺人犯について、逮捕前はどんな様子だったかを、近所に住んでいる住民にリポーターがインタビューを試みている場面であった。

インタビューされた中年の女性は「まさかあの子があんな事をするなんて、思わなかつたわ」とか「私が挨拶したらちゃんと返してくれる、いい子だつたのよ」なんてお決まりの返答をやや興奮気味に鼻息荒く語っていた。このおばさんは至極まともだ。ビィコーズウ、少なくともこのおばさんはインタビュー中に顔の筋肉をほころばせてないから。たまにいる言葉と表情が一致しない奴。うすら笑いを浮かべながら「かわいそうだ」とか「信じられない」だの「絶対に許せない」とか言つてるヤソラだ。あいつらは一体どんな心境でものを言つていいのだろうか。……彼らは田も当てられない様な悲惨な事件を口では残虐だの非道だのと言いつつも、胸の内で実際は心底そんな様な事件を楽しんでいるのだろうか。やはり所詮、他人事でしかないのだろう。結局人間とはそういう生き物だ。どんなに知識を貯えて倫理的に振る舞う真似事をしても、結局は自分の身に起こっていないことに対するはいつだって花見でもしている気分で

しかない。人の不幸は蜜の味とは良く言ったものだ。誰だって自分より不幸な人間を見れば表では同情の意思を示しつつも裏では心の底から蔑み自分より下の人間が居る事実に対し安堵している。そのくせ自分は真人間であるだとか悪い事はしてはいけないだと恥かれも無く平然と言う、そしてあまつさえ自分の事は棚に上げたまま放置しておいて、他人の悪所をわざわざ手間暇かけてまで見つけ出し、それを相手が再起不能になるまで糾弾する、しかし当事者である本人は当然の事をしたまでと言わんばかりに、正義の味方面である。まったくもってこういうのが人間という生物なのだから、いい加減ぼくは人間という仕事を任意退職したくなる。……まあ、しかし、そういうのは訳知り顔で勝手に不特定多数の人に対する想像をしている僕が一番当てはまりそつなんだけれど……。いや、しかし、僕には未だ偽善者の皮を被つていられるだけの理性がある、とは、まだ思つている。

なんて事を一人悠長に思いつつ、ふと時計に目をやる。
時計の針は既に八時十分過を指していた。

……うーん、ヤバイ。

なにを隠そうボクの職業は学生だ。

それも、高校生だ。

世間一般がどうか知らないけど長く辛い人生においてなかなかに甘酸っぱいであろうと期待される時期、そう、高校生。10年後に思い起こしてみるとあの頃に戻りたいと言う輩の絶えない、あの、高校生。思つていて非常に悲しくなっているこの僕も、一応、高校生。だが決して義務教育ではないのも、それまた、高校生。

だから、僕は焦らない。

ゆつくり余裕を持つて無駄にかさばる重たい教科書を学校指定のバックに詰め込んでいく。

大人の男にはゆとりある余裕が大切なのだ。高校生が大人か子供かは各々の主觀に任せるとして、やつとのことで家を出る。

勿論、元気良く「行つてきまーす」なんてアットホームな言葉は一言も発しない。

「…………」

無言の旅立ち、自称現代っ子とはそういうものだ。
強い日差しを全身に受け、億劫ながら、とりあえず自転車を違法駐輪している公園まで歩く。

途中、近所の奥様方が僕の方を指差し、何かヒソヒソと話しているのを偶然、田撃。

間違つても良い意味で噂されているのではないと分かつてはいるが、あえて爽やかスマイルを迸らせて会釈でもしてやるうぜ、と悪魔が僕の耳元で囁いてきたので、なんとか自分の手の平とじりとりをして堪えてみる。

おつとづ、おつかあ、おめえの息子は我慢強い子に育つただよ（日本昔話風）。

世間の風当たりを気にしている様では真の解脱者にはなれないと誰かが言っていた様な気がする。別に僕は別次元に行きたいとは思つていなけれど。

自分の手の平にしりとりで三回負けたところで、ようやく公園に到着。

公園の草むらに隠した（？）自転車は、今日も撤去されていなかつた。

その代わり、今日はカゴの中に溢れんばかりの空き缶が入つていた。未だ中身が少しあつて居るのも多數あつた。

仕方が無いので、自転車に前蹴りをかまし、カゴの中の空き缶を地面にぶちまける。

昨日は生ゴミで、昨日はネバネバした成人ゴミシクスだった。
それで今日は空き缶か。

「…………」

今日はなかなかに、運が良い日かもしれない。

そう思つた。

外は夏休みが終わったといつのに蝉がミンミンミンと小づるさいを通り越して僕的には全滅してほしい位づるさじ。みんなみんみんの方がふさわしいか? 心なしか蝉の鳴き声がミンミンミンからシネシネシネに聞こえてきたのだが、耳の錯覚とは真恐ろしいものである。

まあ、そんな事はどうでもいい。

問題は蝉の鳴き方ではなく、この異常な暑さだ。

まだ自転車で走り始めて十分と経つてないのに汗でワイシャツが背中に張り付いてくる。はつきり言つて気持ち悪い。いや、はつきり言わなくても十分すぎるくらい気持ち悪い。中にタンクトップでも着てくれば良かつた、と少し後悔したが、時既に遅しなのでなるべく頭の中をマシュマロにする方針で生きたいと切に思う。

前方の信号がまるで青から赤に進化しようとしている全身タイツのオッさん(中身が)(たぶん)のカラータイマーみたいにせわしく点滅を繰り返している。

じついう時は、その人の性格が良く現れる場面だと僕は思つ。

もう間に合わないとふんで無駄な体力を使わずにゆっくりと進む奴と、別に急いでないのになぜか分からぬけど無性に全力ダッシュしたくなる奴つていると思う。そこに今の僕の様に限定された時間という制限が加わると、これまたおつなものだ。

で、僕は勿論前者の方である。

僕の場合は時間が絡んできても大体前者の方を選ぶと思う。体力無いし。

「…………」

それにしても、暑いな。

暑い中、わざわざ狙つて照りつけていると錯覚しかねない太陽の

光に焦がされている他校の生徒を尻目に、僕は自転車を道の小端に

スルメになりたいらしい。

光に焦がされている他校の生徒を尻目に、僕は自転車を道の小端に寄せ、木陰に隠れて一休みをする。

木陰に居るのに額に汗かきむさ苦しい醜態を晒しながら休んでいると、僕の目の前を、赤いラングセルを背負った女の子と黒いラングセル（赤だつたら怖い）を背負つた男の子が仲良く手を繋ぎ、笑顔で駆抜けといった。

このくそ暑いのに「うふふ」「あはは」とか聞こえてきそうで一気に真夏の怪談直しく背筋がブルブルしかねない。

僕はその様子を気の抜けた炭酸飲料みたいな心持ちで眺める。

今時、珍しい光景。

ボーイとガールがミーツして仲良く登校ですか。

うふふ、と、あはは、な世界。

うーん、青春の味がする。

山椒？

なんか苦いね。

そしてふつと思つ……あー死にてーと。

気がつくと、信号の発光ダイオードは既に緑になつていた。

それでも、僕は動かない。

道行く人が僕の事をジロジロと訝しむ目付きで見てきたので、や

つとのことで僕はペダルを漕ぎ始めた。

全く、人氣者はいやおうにも目立つてしまつから困つたものである。

学校に着くと、幸運な事に未だいつもの（事務的）朝のホームルームが始まつていなかつた。僕が教室に入つても声をかけてくる律儀なクラスメイトは人つこ一人いない。

それどころか「あいつ、学校辞めたんじゃなかつたの？」とか「なんで、あいつ、未だこのクラスにいんの？」仕舞には「あいつの席、どつか他のクラスに移動させちゃ えれば良かつたね」と言つもはや空耳という秘技のキヤバを軽く超えて尚かつ音量に全く気を使わない誹謗あーんど中傷のヴォイスが聞こえてくる始末。こんな時は自分がラブコメの主人公になつたと錯覚しておくと、心なしか耳が少し難聴になれる様な気がしないでもない。

夏休み前の平時から「キモイ」「死ね」は当たり前なので、いつもの事いつもの事と思い、軽くスルーしておきたい。

夏休み前と何ら変わらない日常。

歯車が欠けているから噛み合ないだけだ。
合わせる気も無いけど。

それはあつちも同じじか。

まあ、取りあえず、いつも通りだな。

平穀無事な平和ボケゆとりな逆バブル世代の僕ですから、こんな態度は慣れっこ、これ常識。と、いつも通りに下らない事を考え、鼻を否応にもさす臭い香水の匂いに顔をしかめつつ、なにげなく教室を見渡すと、男も女もやたら茶髪の生徒が多い様な気がした。女子なんか化粧をしている生徒もちらほら。何やら田の周りにマスクを塗りすぎてパンダみたいになつてている女子生徒までいる。うむ、これが夏デビューってやつか。僕も夏デビューすれば良かつた。なんて身の毛もよだつ空想を頭の隅へ追いやり、幸運にも未だ定位

置に存在していた『まいちゃん』（一一号）に座りながら取りあえずアホみたいに頬杖をついてみる。

と、髪をツンツンにした黒ぶち眼鏡の男子生徒が息つきながら教室に飛び込んできた。

彼の名前は勿論、僕の脳内メモリーには記憶されていない。といふか、初めて見たような気がする。

何事か、と女子も男子も彼の方へと視線を投げかける。

僕は、窓の外の青々としそぎて返つて気持ち悪い位などここまで広がる空を見上げながら、耳だけそちらの方に向けた。

「ニュース！ ニュース！ 大ニュース！ 転校生！ 転校生！ すうんごい美少女！」

男子生徒が述語の抜けた主語だけの言葉を発する。

どうやら学年と季節、そして学校の三拍子を外しまくった転校生が隣のクラスに来るらしい。

この時期に転校してくるなんて、まるでどつかの漫画じゃないか。よほど深い事情があつたに違いない。例えば前の学校の窓を全部たき割つてムカつくヤツをバットで片つ端から血まなこにしたとか、愛する許嫁のためにわざわざ海外の学校からはるばる日本のこんなしょぼい＆小汚い、ええ小汚いデスともな学校に転校してきたとか……あるわけないか。

男子生徒はなおも興奮した様子で止めどなく何か話し続けていたが、僕にはもうその声は雑音にしか聞こえなかつた。

一時間田の授業は英語一だった。そして、僕のクラスの担任は英語教師である。

よつて、ホームルームが終わると誰も願つてもないのにすぐに授業に突入した。

僕の通う学校は少し変わつていて、夏休みが終了して最初の登校日に喚起力ゼロの蒸し風呂の様な体育館に強制的に集められ校長の有り難い訓示を聞く習慣はなく、素晴らしい作詞・作曲の校歌を歌うというインディアンみたいな儀式も強制されない。おまけに堅苦しい頭髪チェックやら持ち物検査もないという比較的自由な校風だつた。だつたら、茶髪じゃなくて髪の色が金髪や銀髪はてはピンク髪そしてレインボオウな生徒が居てもいいじゃないかと思ったのだが、残念ながらこの学校には僕を含めてそんな大層な度胸を持つ者は居ない。誠に残念遺憾の極みである。いや、ホントに。

「霧崎、次の文を略してみる」

英語教師兼担任（）が妙に高いかなきり声で僕を指名してきた。

「…………」

え、面倒くさい？

いやいや、僕は自称窓際図書委員ですよ。

それはどうでもいいとして。

僕がもし歌舞伎町辺りの売れっ子ホストだったら「御指名ありがとうござります、マドモワゼール。今夜もドンペリピンクうお願いシャツすう————！」

なんて言つた可能性が微少にもあつたかもしね。けど、あいにく僕は善良な高校生なんで……。

寝たフリを決め込む。

「なんだ、霧崎はまた居眠りか、誰か起こしてやれ」
「…………」

前方後方右斜め両方向の生徒の皆さんは、誰一人として、反応を示さない。

……全く、皆、恥ずかしがり屋さんだなあ。

「…………あ～、じゃあ牛島、お前が訳せ」

「え～俺つか？　え～と彼女は」

なんか、サラッと僕のドキドキ偽装就寝が流された様な気がする。なんか……得した？　と、あくまで、前向きに物事を捉えてみる。人生前向きに物事を考えないとやって生けませんな。

特に、僕みたいなヤツはそうだと思う。

まあいつも全然前向きじゃないけど、といつか地面に恋焦がれて生きているけど。

せっかく嘘寝したのに起きるのも何か勿体ない気がしたので、とりあえず、残りの時間は人間の生活で欠かす事の出来ない貴重な睡眠時間に当てる事にしよう。願わくばレム睡眠位にはもつていきたいものである…………。

幸せについて考えてみたら……

一時間目終了するキーンコーンカーンコーンという聞抜けなチャイムとほぼ同時にクラス中の男子が教室から消滅した。あと噂好きな女子もついでに何人か消滅していた。

なんだろう？ 皆で集団連れシヨンかな？ なんて事はないだろう、多分。

おそらく、例の転校してきた美少女を一日持もうと、さながら伊勢神宮に向かう古の熱心な信者の如く隣りのクラスを覗きに行つたのだろう。勿論、僕は弁慶の立ち往生の如く（座つているけど）席から一步も動く気は無い。うるさい輩が消えて教室の人口密度が丁度良くなつて良かつたと思う。欲を言えば残つた輩にも退出願いたい所だか、それならば僕が出て行つた方がよっぽどてつとり早いのでそこは自分の胸の内に秘めておくことにした。

一時間目の論理と三時間目の英語Wは堪え難きを耐えほんとに死ねる位忍び難きを忍びなんとか耐えた。が、しかし、ここまで耐えてきた自分に非常に申し訳ないが、四時間目の数学は果てしなく苦手な科目なので、自分の弱い心に負け、泣く泣く辞退させてもらつ事にした。

勿論、教師には心の中で「授業をサボりますよ」と言つておいた。

僕、真面目だから。

本当に死ねる位の長期の休み後の授業は、死にそつた位、そう、本当にほんなんなんなんんとおおおおーーーーーに死ねる位退屈なモノである。あえて言おう。教室で真面目かどうか分からぬ

けど、一応、授業を受けている生徒達は愚者……じゃなくて勇者の集まりであると。

そんな訳で、僕はあまり利用される事のない日本史やら世界史の資料が無駄に置いてある教室の奥に、なぜか置いてあるベンチ（公園に置いてあるようなブルーのヤツ）の上に寝そべりながら、皆より一足早い昼休みを満喫していた。

ここは、薄暗くて風の通りも悪い僕の数少ないリラックススポットの一つだ。

室内はホコリっぽく、ほのかにカビ臭い。それ故、生徒も教員も滅多な事がないとここを訪れる者はいない。たまに、授業時間を完全無視した男女（僕に理解できない存在）が突如として訪問してくる事はあるが、大体、黒板前の長机の席に座すので、僕の存在には気づきもしないで自分達の世界へどっぷりと漬かってゆく。まあ、こちらから関わりを持とうとしなければ無害の部類に入るだろ。とにかくにも、今現在僕の憩いを邪魔する奴は居ない。

僕は静かに目を閉じた。

そうして現代の食料問題について考える。

今日の昼食はどうしようか？

また、水道水で凌ぐかな。いや、それだと5時間目の持久走の時120パーセントの確率で貧血になつてぶつ倒れる。当然、誰も救いの手は差し伸べないので、体育教師のむさい肩に担がれて保健室へ……うん、考えただけでも身の毛がよだつ。

仕方ないが、コンビニで固形物でも買って凌ぐか。いや、だがしかし……最近まともな物を食べた記憶が無い……。当たり前のことだが僕に弁当なんて高等なものは作れないし作ってくれる心優しい彼女は、言つまでもない。

そんな事をたわいもなく考え込んでいて、唐突に思った。

幸せってなんですか？ と。

なんか、テレビ番組のタイトルみたいな質問になつてしまつたが。

……幸せって何だろうか？

毎日三食規則正しくバランス良く食事をとる事だらうつか？

そうなると僕は即幸せの対象外になる。

それとも、何不自由なく日々の生活を送る事か?

いや、素晴らしい生涯の伴侣を迎えて仲睦まじく一緒に年老いていく事だろうか？

別に豊な国に生まれたから幸せってわけでもなさそうだし、貧しい国に生まれたらそれはそれで世間一般的な幸せを掴む可能性は限りなく低いものとなるだろう。

三十石實原一七四一
三
全
日
本
ハ
無
い。

断言出来る。

それ位幸運を感じた事が無い事に自信がある。

それはないだらと思いたしか

僕には幸せが何なのか本当に分からん

倒的に少ないだろうけれど。

ほんのささいな事で幸せを感じる事が出来る、と本には嘘か誠かわからぬけど書いてあつたし、そうなると僕にはほんのささいな幸せも巡つて来ないのか、とマイナスな方面に僕の思考はバランスを失い沈没寸前の某客船の如く傾いてしまう。

幸世とは何かと考えれば考える程に訟が分からなくなつてくる。

あ、御免なさい……誰に謝ってるんだ僕?とにかく高校生の分際で幸せについて考えようとして御免なさい分相応でしたすいませんすいませんすいませんすいませんなんなんで僕があやまらなきやあいけないんだどうして僕が?なんでかな?いつもどうして僕が?僕が下らない人間だから?好きで人間やつてるわけじゃないんだけど?もういいんだ疲れたんだもう許してくれ本当にあーーーもうだめだ死んでしまいたい死にたい死にたい死にたい?っていうか君そんなに死にたい死にたいつてホントに死ぬ気あるのかね?ええそうですがとも僕は所詮死ぬ気なんてないですよおーーだつて死んだつて虚

しこし痛いし怖いしああーーでも死にてーー嗚呼 青春したいな
ーー本気じやないけどあー僕が分からないあーーーあああああ
あああああああああああああああ死ぬつてなだ?なんなん
だあーーー分からないああああああああああああああああ
-----あ、ここ辺で止
めと。.

.....だめだ。

思考が搔き回されてめちゃくちゃになる。

いつもこれだよ。このまま行つたらまた授業中(戻る気はないが)
に発狂しかねない.....。

結局、幸せがなんなのかなんて僕には分からない。
そもそも僕には分かる訳の無い事だったんだ。

.....止めよ、こんなくだらない事を考えていろとろくな事が

自殺頭痛

「……なんで」

予兆はない。

その数秒前までは、どんなに下らない事だつて考えられるし、本当になんの痛みも感じない。

だけど、僕には分かる。

いつもそうだ。

確かに前触れはなくとも、僕は本能的に気がついてしまう。

あと数秒で、僕の頭が破裂すると。

「……ヤバい……頭が、せばこせばこ、へる、へそ、タイミング
グわ」

それは突然やつてくる。

タイミングなんて計れない。

そいつは痛みに耐える準備の時間さえくれない。

「があ、ぐ、ああああぐつつつつつあああぐ、ぐつがあ
ああああああああ」

僕は床に崩れ落ちた。

無様に顔面から。

右目の奥に、この世のものは思えない痛み感じたから。立つている事など不可能だつたから。

それは痛みなんて生易しいものじやない。

形容するならそれは『死』そのものだ。

目の奥から生暖かい血液がじわじわと溢れ出してくる。

眼球の奥で、アイツが、僕の神経を、肉を、引き千切つて、食い散らかしているからだ。

「うう、つつうう

もう、叫ぶ事も出来ない。

生まれてきた事を後悔する暇も無い。

絶望する事も出来ないまま、只、波の様に押し寄せてくる痛みを受け入れるしかない。

僕に出来る事はただ歯を食いしばって頭を抱えて唸る事だけだ。唯一の救いは痛みで立ち上がる事が出来ない事。

もし立ち上がれたら、僕は窓を突き破つて校舎から飛び降りてしまふから。

死ぬ時まで誰かに迷惑を掛けるのは「免だ。

僕の願いは、今すぐこの想像を絶するような痛みから逃れる事。声に出して叫びたい。

殺してくれと。

でも誰も僕を殺してくれない。

僕には死ぬ権利がないらしい。

だから死ねない。

死ぬ価値すらない。

頭の中の血管、神経を全て、根こそぎ引っ張り出してしまいたい。それができないのなら……。

痛みの波は徐々にその度を増していき、僕は自分自身の手で、いつもそのこと右目を抉り出してしまいたい衝動に駆られた。

もう耐える事が出来ない。

僕の意に反して、手が右目へと向かつた。

震える指先が、生暖かい粘膜を纏つた眼球に触れる。

抉り出したい。

衝動が抑えきれなくなっていた。

アイツが眼球を突き破つて、外に出てくる前に、自分自身で、僕

を終わらせる。

もうそれしか方法が無い。

人差し指と親指で、滑った目玉を掴もうとした、瞬間。

両目から有刺鉄線を突っ込まれ、脳髄を絡めとられ一気に引き抜かれたと錯覚しかねない痛みを感じた。

反射的に指を離す。

痛みに呼応して、眼球の奥から流れ出す様に、痛みが全身へと伝染していく。

心臓の鼓動が胸を突き破る程に、僕の体を上下させた。

目の前の世界が、何時にも増して、歪んでいる。

机も、椅子も、黒板も、全てが溶けてしまったかの様に、その形を成していない。

僕の頭の中の内容物が溶けてしまつたからだろうか。
まるで薬の中毒者の様だ。

目の前の光景は曲りくねり、机や椅子が、まるで蝋燭か何かの生き物の様に、床を這いずり回っている。

いつのまにか、痛みは無くなつていていたが。

目の前の光景は、常軌を逸していた。

赤や青の光の柱が刺し込む様に乱立して、世界が光り輝いている。
そんな光景の中で。

僕は何も感じなかつた。

痛みは消えた。

そして音も消えた。

僕の感覚が無くなつていた。

僕は指先で眼球を掴んだ。

感覚が無い。

ただ目玉を掴んだという不確かな確信が有るだけだ。

指先に少しだけ力を入れる。

目の前の世界が圧縮された様に縮小する。

さらに力を込めようとしてみる。

目の前の世界が蠅燭の炎の様に揺らめき反転した。
掴んだものを、思い切り握りつしてみる。

目の前が、真っ暗になった。

パンチララブチキャバ女子（田の周りはパンダ）

「…………」

意識がある。

少しだけ考えて、目を開ける。

目の前の光景は、いつも道理だった。

覚めてしまった。

もう一生目覚めないとと思っていたのに。

何時もこれだ。

物事は思い通りに行かない。

全く嫌になる。

残念だけど。

仕方がないな。

「息は…………してるのか」

…………どうやら、僕は…………まだ、性慾りも無く、小指程の価値のすら無い、いや、便所の落書き程の価値すらない人生を、生きている様だ。

もう、頭は痛くない。

時計を確認する。

どうやら30分程気絶していたようだ。

…………。

なんかスースーすると思ったら……なんで、僕は、パンツ一丁な

んだ？

……まあ、いいか。

今回は失禁もしていないし、目立つた自虐行為の跡も見当たらない。髪の毛も……いつもよりは、引っこ抜いていない。

最悪な出来事の後にしては、悪くない状態だ。

しかし、まさかあの頭痛が、今日、来るのは。

薬はちゃんと飲んでいたはずなのに……全く、ついてないな。

最近、発症する間隔が短くなつてきている様な気がする。

今回はなんとかなつたけど、次にきた時にまた耐えられるだらうか……。

一体、僕はあと何回この痛みに耐えればいいのだろう。

人間の体は痛みに耐えられる様に出来てるなんて適當な事を言つたヤツが居るんとしたら、僕はそいつの顔を原型が無くなるまで殴つてやりたい。

そんな事を言つヤツは本当の痛みを知らないヤツだ。

人間は理解を超えた痛みに耐えられやしない。

人は痛みで死ぬ。

痛みで、死ぬんだ。

僕も早く楽にな。

「…………」

やめよう。

これ以上考えるとただでさえ低い血圧がもつと低くなつてしまふ。

とりあえず。

そうだ、保健室へ行こう。

あの絶望的な痛みはもう感じないが、もう授業に戻る気が

1ミクロンもしない。

そうだそれがいい。

そう思い、ベンチから起き上がるうとした時、

教室のドアが鈍い音を上げ、真横にスライドした。

……タイミング、悪いな。

少しは時と場所を考えて行動してほしいものだ。

僕は慌てて、頭蓋を引っ込んだ。

机と椅子の僅かな隙間から侵入者の様子を伺う。

青いチェッククライൻの入ったライトグレーのスカート、そして黒いニーソックを履いた細い脚……うむ、太もも白いな、合格だ。

……と、ふざけてる場合じゃなくて。

女子？ しかも一人？ どこの制服だ？ この学校のパンチラブチキヤバ女子の制服じゃないぞ……。

腕時計を確かめる。

まだ、どの学年の生徒もこの蒸し暑い中クーラーも無い教室で忍者の如く授業を受けているはず、な時間帯だ。

息を殺して女生徒の動向を伺う。

どうやら、女生徒は真っすぐこちらに向かって来る様だ。なんでこっちに来る？

まさか、僕がここに潜んでいるって事がばれた、とか？

……いや、それは無いはずだ。

僕の擬態は完璧、というほどではないが、あの位置から僕を視認する事はまず不可能。

そこんところは僕が実証済みだし。

そんな事を考えて、僕があたふたしているのもおかまい無しに、女生徒はどんどん近づいてくる。

これは、やっぱあい。

このままじや見つかる。

見つかつたら後の対処が面倒だ。

なにより、話すのがやだ。ていうか消えてくれ頼むから二秒以内に消えてお願いします神様仏様大仏様御老公様サマンサタ

「…………」

全然消えない……。

なんで？

さて……どうしようか？

ここはまた寝たフリでやり過ごすか。

僕は腕で目を隠し、あからさまに寝たフリを実行する。

足音は、もうすぐそこまで近づいてきている。

と、足音は僕の目の前の長机の寸前で、突然、停止した。

なんか、ちょっとドキドキしてきたな。

ホラー映画だとこういつ時、目を開けると目の前にお顔真っ白な化粧の濃い呪霊がいたりするので、腕をどこかして目を見開きたいのを歯を食いしばり必死に我慢して寝たフリを続行。

足音はしばらく停止し、数秒後、もと来た道をコシコシというわざとらしい音と共に引き返していった。

そして、教室の扉の閉まる鈍い音が再び僕の耳に届く。

「…………」

どうやら、侵入者は自分の愚かさに気がついて去つて行つたようだ。

もしくはボクのむさ苦しい姿（半裸）（パンツは履いてる）（少しほみ出している）（汗だく）を見て尻尾をまいて逃げ出したか。いずれにせよ、今回は何とか危機を脱した様だ。

やつとの事で眼前を覆つっていた腕を払い、目蓋を開くと、

目の前に、

青白い顔の少女……いや、幼女の顔が、あつた。

心臓が驚撃みにされてあげくの果てに握り潰された様に停止する。一瞬、顔から元より無いに等しい血の気が一斉退場した。

声がない。

幼女と目が合ひ。

切れ長の瞳に睨め付けられる。

不覚ながら、目が、離せない。

そして硬直。

さながら、大蛇（幼女）に睨みつけられた襟巻きトカゲと言つたところか。

万事が窮屈な感じで、僕がちびりそつになつていた、いや、實際少しだけちびつていたが、そんな時、

「ふつ、ふふふふ、あつはつはつはつはつはつはつはひつひつひツツ！」

幼女が、突然、大声で笑い出した。

「！？」

あまりに突然で、さすがの僕も冗談の一つも思いつかない。

おそらく、今世紀最大の惚けた顔であつただろう。

「あつ、ごめん、ごめん、驚かせちゃつた？」

いや、あなた、驚かせちゃつたも何も危うく心臓停止して南無阿弥陀仏つてところでしたよそこそこ分かつてますかっていうかふざけんな。

「驚かせたも何も危うく死にそうに……それより、あんた、誰？見ない顔だけど……」

何時もなら秒速で顔を背ける僕だが、ショックのせいか、まじまじと少女を見つめてしまつ。

僕の目の前に居るのは、切れ長の瞳が特徴的な、肌の白い、小柄な、まあ、なんというか、幼女だ。

「わたしは、柳瀬伊万里。今日この学校に転校してきたんだ。いやー、この学校思つたより広いねー。危うく迷子になりかけたよ。まあ、前の学校の五分の一位だけど。で、君の名前は、なんての？」
森鷗外です。

なんて言つてもいいんだけど、すぐばれそうだから止めておこう。伊万里か、なんか瀬戸物焼みたいな名前だな。さては、両親は瀬

戸出身だな。どうでもいいか。そんな事は。

七八五

まつたく付き合つてらんないよこんなサイコ幼女こつちはただで
さえ短い人生をさらに短く死そうになつたんだよまあそれはそれで
いいんだけどでもしかしながら高校に小学生が

突然、後ろから何かを首に巻き付けられた。

思わず、ホントに思わず、聞抜けな声が口から飛び出る。「ちょっと待つて。君、それがこんな可愛い女の子に対する反応なわけ？ あと、私は歴とした高校生ですから！」

「よ、ぐるじい、ぐび、じぱつてる、つで」

「じゃあ、あなたの名前、教えてくれる？」

「ぐわがつ、だ」

首に巻きついていた何かが解かれる。

やつとの事で、僕は窒息の危機から逃れられた。

「く、お前、それ、僕のワイシャツじゃないか」「僕の首を絞めていた可かとは、僕が脱ぎ捨てていた、ワイシャツ

であつた。

「あのや、神、上半身裸で廊下に出でつもりだったの？」

「…… さうだけど」捕まるけど。

「……まあ、とりあえず、コレ、着て
く、こんな幼女、いや少女から施しを受けるなんて……不覚極ま
りない愚行だ。

……それにしても、コイツが高校生?
見た目から判断したら小学生にしか見えないのに。
ある特定の人種にウケそうだが……。
まあ、どうでもいいか。

「ふう、じゃ、僕、授業があるから」出ないけど。

「ちょ、ちょっとまって、だから君の名前教えてよー」

「は? なんで僕が不法侵入の小学生に名前を教えないといけな
ぐえ、ちょ、ぐるじい、わがつだ、おじえるから」

「もう、早く教えてくれればこんな事しないのに」

「なんだ、この幼女? 何でロープなんて持っているんだ?
くそ、なんか面倒な奴に捕まってしまったみたいだ……。

早い所、こんな奴からおさらばしたい。ついでにこの世からも。
「僕の名前は……」

慣れ慣れしいヤツ

「……僕の名前は、霧崎」

当然、少女の方など微塵も向かず、黒板に向かつて自己紹介をする。

「霧咲くん……霧が咲くか、なんかカツコイイ名前だね。多分ご両親は秩父出身だね。いやー、私も秩父は6番目位に好きな場所だし、いいところだよね、秩父つて。行つた事無いけど」

いや霧が咲くつて意味が分からぬし。そもそも名前じやないし名字だし。というか漢字間違つてるだろコイツ。そして最後らへん絶対適当に言つてんだろ。

「下の名前はなんて言つの？」

「……刑」

ここにまた首を絞められたのでは次こそ本当に失神しかねん。

「けい、ケイか……いい名前だね」

なにを根拠に言つているのか……。

「けい」つて響きの名前の奴は五万といふけど、刑つて書く奴はあまりいないとと思う。

なんたつて、死刑の刑だ。全くナンセンスじゃないか。心底親の顔が見てみたいよ。本当はこれっぽっちも見たく無いけど。ていうか、馴れ馴れしいやつだな……。

「今、授業中だよね……なんで、あんた、ここに居んの？」

転校初日から授業をバツクレル奴なんて聞いたが事ない。言語道断だ。僕が言うのもなんですけど。

「だつて、なんだか退屈なんだもん。大体さ、教科書に書いてある事をいちいち黒板に複写して、それを私達がまた書き写して、ってなんか意味あんのかな？ ただの一度手間だと思うけど。先生の細

かい説明なんかも大切だと思うけど、そんなのより参考書とかネットとか使って自分なりのペースで勉強した方が効率的だと思わない？」

「だったら学校くんな塾にでも籠つてろ、と言いたい気持ちはそつと簾笥に閉まつて。

出ました。出ちゃつたよ。なんで出て来る？

これができるだけタイプと言つやつか。

漫画の住人だと思つていたけど、実在したんだ。

少し感動した。もう満足だ。

こういうタイプは大体、口だけで全然勉強できない奴と学校の授業なんて簡単すぎて受ける気しないよつてタイプの一一種類に分けられそうだな。少女は……勉強はできそつだけど……かけ算とか、割り算が……。

「……僕は、君程頭が良く無いし、今だつて授業サボつてゐるわけで一応、後者と仮定して話そつ。

「別に、私が頭が良いつて言いたい訳じやないんだけ、……まあ、いいや。ところでさ、ケイはなんで授業サボつてゐの？　しかもこんな小汚い部屋で？」

いきなり下の名前で呼ばれたのはボクの数少ない交流関係の中でも初めての経験であります。

なんなんだこいつは？　馴れ馴れしいんだよ。ていうか小汚いつて言つたな。

「……僕は……ただ、あの教室に、居たくないから」

嘘は言つていない。

あの教室に居ると山岳グリラみたいに息を殺して、淡々と授業を受けてないといけないから。

休憩時間に僕が取る行動パターンなんて数種類しかない。

教科書と睨めっこをして遊ぶか、ひたすら真っ白なノートを黒鉛に染めていく作業に従事するか、窓の外を見てバードウォッチングに徹するか、もしくはトイレに行くか、それくらいしか、僕にはや

る事がない。

たまに聞こえる僕の悪口には、聞こえているのに、無理矢理聞こえていないフリをして、対処する。

仕方が無いにも程がある。

教室内で僕は忌み嫌われた存在なのだから。

笑いたい。

……笑おうか。

はつはつは……。

詰まる所、僕は、教室に居てはいけない存在。だから、仕方がない。

それに、僕は始めから、諦めている。

よし、今度から売店の自動販売機にでも交代してもらおう。あばちゃんの方でもいいや。

「な、んか、暗い顔してるよ、ケイ？ よーし、こうなつたら、恒例のアドレス交換しようか！ うん、それがいいよ。ていうか、親睦深めるためにさ、大学1回生時は誰でもいいから知り合った人とメアド交換しつければ十回に一回はコンパに呼ばれるっていう理屈でさ、ね？」

なんの恒例だよ。

そして、その理屈は僕には当てはまらないぞ、とはこちこち言わない。

というか、ほんと……に慣れ慣れしいヤツだな、こいつ。

イケメンに感情移入が出来ない……

携帯か……存在 자체忘れていた。

たしか入学時に無理矢理持たされた奴が腐つてなければポケットの中にあるはずだけど。

ズボンのポケットの中を弄つてみると、何やらひんやりとしたものが指先に触れた。

掴み、ポケットから物体を引き抜こうとして、しばし、思考にふける。

当時最新機種だつた薄型軽量の携帯も今となつては店で売られているか売られていなか分からぬ値段で売られている。つまり値下げ。いわば旧世代の産物と言つた所か、ちょっと違うか？ いや、そんな事はどうでもいい。

それよりも、なんで、僕は、こんな慣れ慣れしいやつとアドレスを交換しようとしているのだ？

そもそも、僕は人間が嫌いなのにどうしてこんなにも人間と会話をしているのだろうか？

というか、僕も一応は人間なんですけれども。

いや、この際そんな事はどうでもいい。いや良くないかいやしか

し

そんな事で僕が思考を搔き乱している間に、少女が、勝手に僕のポケットに手を突っ込んできた。

ああ、なんてことだ！ 女の子がはしたない！ マァイガ！ と一応、思つてみるか。

「おーケイの携帯薄いね。それに新品みたいに傷一つ無いし。ケイつて物を大切にする人なんだね。偉い偉い。やっぱリケイはそうで

なくちゃ。それじゃ、はい」「

少女がボクに携帯を返してきた？

なんか、いい感じに勘違いされて偉い人にされた。僕にしては大出世だ、で？

「なんで、携帯突き出してんの？」

「え？ だつてメールアドレスつて赤外線通信で交換するもんじよ、普通？」

「…………何それ？」

「またまた、じらばつくれけやつて。女の子とメアド交換するのが恥ずかしい気持ちは分かるけど、誰も見てないからイイじゃん、ね？」

少女はすり師の様に見事な手際で僕の手から携帯をさらりと抜き取り、何やらボタンをピポパと押し、ほどなくして返却された。

返却された携帯の液晶画面には『送信しますか？』という表示が。

「ほれ、早く送信しなされ

少女の携帯と僕の携帯は無理矢理お見合いをさせられ、勝手にボタンを押される。

「じゃあ、今度はわたしのメアドをつと、ほい、送ったよ」

数秒後、僕の携帯が家の物置に放置されているこのままでは永遠に眠り続けるであろう古いマッサージ機の様にブルブルと震えだした。

画面を開くと『メールを受信しました』の表示が。

受信ボックスを開くと、そこには一通の空メールが届いていた。

件名には『ヨロシク！』と。

ちなみに、僕の携帯のアドレス帳には今の時点では少女を含わせて一人しか登録されていない。今後、増える予定は、今のところ……というか今後も、多分一生、皆無だ。

それにしても、携帯つて赤外線でメールアドレスを交換できるのか。

へー、今の今までメール交換なんてしたこと無かつたから全然シ

ラナカツタヨ。

テクノロジーの進化、恐るべしですな。

え、どんだけ脳みそ沈殿してんだって？ ああ、あんまり使ってないから。

「なんか楽しい事あつたらメールしてね。それと、こつちからもばんばんメールするから。この複雑にデジタル化された社会で、情報交換は重要だからさ。勉強の事とか遊びの事、なんでもいいからさ、ケイはね、私に、気楽にメールしてくれていいんだよ？」

何だその理屈？

……気楽にメール、か。

「冗談だとしても、その言葉は僕には似合わなすぎる。

幼女、もとい少女よ、あなたは僕が女の子に気楽にメールを打てる、そんな現代の光源氏の様な無責任な男に見えるんですか？ だとしたらすぐさま病院に直行する事をお勧めしますあしからず。

「…………」

「何て言えば良いのか分からず口を開けたまま、またもや惚けていふと。

「それじゃあ、お腹も空いてきたし、なんか食べにでも行きますかー

と、少女が暢気にのたまつた。

まだ、他の生徒は授業中ですが。

そんなのあたしや関係ないわーってことですか。そうですか。ま、それもいいか。つてちょっと待ていツツ！ 落ち着くんだボク！ なんだこの展開、なんでボクこんな流されているんだ？ クールになれ！ そうビズになれ！ こんな展開深夜アニメでも早々ないぞ！ これは罠だ！ そうに違いないボクを陥れる罠に違いない奴の罠だ！ 騙されるなボク！ ていうか奴って誰だ？ あーもう誰でもいいやそれより疲れたわ眠いわイケメンに感情移入なんて出来ないわもうどうでもいいやつてどうでもよくないツツ！

「……なんで僕が……あんたが、一人で……行けばいい

少女の案は当法廷で却下されましたがの「」来店を御持ちしておりませんさようなら。

「えー、なんで？ 一緒に「」つよー、私、まだ転校初日でさ、何処のお店が美味しいとかわからないの。君は長い事この学校に通つてるんでしょ？ だつたら、ここから辺の地理に詳しいはずでしょ？ ケチな事言わないで迷える女子に道案内してよー。なんかおごつてあげるからさー」

しつこい奴だ。

大体なんで外で食べる事になつてているんだ。

校内には不味いと旨いの中間に位置すると評判の食堂もあるし、パンしか売つてない商店だつてあるのに。僕はどちらも行つた事無いけど。というか適当に言つてるけど。

それにもしても、この少女は一体なんなんだ？

こんな地味で人付き合い皆無で気持ち悪くて貧乏臭くて本当にケチでカスでチリで南米辺りでカツ上げされそうな僕になんでそんな馴れ馴れしく接してくるんだ？ 一体何が目的だ？ カツアゲか？ それとも家の財産が目当てか？ それとも、僕の体？

「冗談はさておき。

「……僕なんかじやなくて、自分のクラスの、もつとまともそうな奴をさ、誘つたほうがいいよ」

「えー、だつて、私のクラスの人、女子も男子もみんなどうでもいい様な事ばつつか聞いてくるんだもん。さすがに何回も何回もなーんーかいも同じ様な事聞かれると飽きちゃうの。何処から来たの？ 何でこの学校に来たの？ 何処に住んでるの？ とか、なんで私のプロフィールをいちいち繰り返して言わなきやいけないの？ 私はインゴジやないのホモサピエンスなの！ 直立二足歩行してるの！」

なんか、この少女も僕と同じ様な匂いがするよー。

でも、僕とは対局に位置する様な氣もするなー。

というか、転校生が転校初日に他の生徒に質問攻めに合つのは、

それはもはや全国の学生の伝統と言つても過言ではないくらいに常識的な事だろ。

それをどうでもいいって、まあどうでもいいこと言えよばどつでもいい事だけだ。僕には関係ないし。

「じゃ、行こつか」

「なんで、僕が」

「えー？ 行こつかー」

「……1人で行けばいい」

「こんなか弱で可愛いキューートでセクシーな女の子に夜道を一人で歩かせる気ですか？ それは正気の沙汰で言つてるの？」

「しつこいな、今昼だし、あんた絶対高校生に見えないし。ていうか、あんたさ、さつきから慣れなれしいんだよ」

「人とのふれあいって結構大切だと思うよ？」

「もういい……もういいから……もう、僕に、干渉しないでくれ

「だが、そこがいい！」

「おまえ、頭湧いてるのか？」

「ちょ、失礼だよ！ 謝つて！ 私に土下座して！」

「は？ なにを、つて、おい、やめろ、なんで縄、つて、それはホ

ントにヤバいから」

この後、僕と少女の行く行かない論争はおよそ五分間続いた。

そして、果てにこのシーソーゲームは不毛と、やつと気がついた僕の手によつて終止符が打たれた。

サンマ定食（585円税込）

あの後、半ば強制的に外出させられた僕は「美味しいものが食べたいなー」という高校生の昼休みに摂る食事には到底似つかないリクエストを聞き入れ血まなこになり『おいしい』食事所を探した結果、時間も時間になつてきたので少女を行列の出来るファミリーレストランに案内した。

僕的には、無人で美味しい食事を出してくれる店を探したのだが、残念な事にそのような店は学校の近辺には存在すらしなかつたみたいである。

少女がなにやら文句を言つていた様な気がしないでもないが、とりあえず聞こえないフリをしといた。

僕らが来店したファミレスは（ファミリーなレストランと謳つているもののファミリーよりはチンピラかぶれの高校生の方が多い）店の事などおかまい無しの我が校の在校生に人気のたまり場であった。

が、しかし、この時間帯には当然この場所にそのような学生は存在しない。

つまり何が言いたいのかというと、

我が校のチンピラかぶれはしっかりと授業には出るらしい、とう事を言いたかった。

僕らは、店の一番奥の窓際席と正反対の環境の座席に隣り合つて着席した。

この隣り合つ、という行為は別にバカップルに着想を得たというわけでは毛頭無く、僕の強い要望故の行為であつた。

当然の如く少女からの猛抗議が寄せられたが、我らの脳内議会はイエスかノーか半分かの三択を少女に提示し、無理矢理承認させた

次第である。

入店後、2分程で僕の注文は決まった。

どうやら少女の方も既に決まったようだ。

「「注文はお決まりでしょうか?」」という明るめ鬱な声（僕的偏見）が聞こえてくる。

おそらく若い女性の店員だろう。

僕はメニューを指差し自分の注文を言い、自分の注文が終るとすぐ席を立ちトイレに直行した。

どうも、こういった場所はあまり好かない……。

人が沢山いるし、聞きたくもないのに笑い声が聞こえるし、人の臭いがするし、明るいし、アーシニティーといいう気分に否応にもなってしまうのだ。くわばらくわばらくわばらくわばらくわばらく。

注文した料理が運ばれてくるまで、僕は少女の休む事の無いトーグに適当に相づちを打つたり、5回に一回くらいのペースで自分の意見を述べたり述べなかつたりして、なんとかやり過ごした。

人と話すのは僕の苦手科目（数多くある）だ。

正直面倒くさい。人として駄目である。ていうなんで生きてんの？ とかそういう話は無しの方向で。

ほどなくして、注文した料理が運ばれてきた。

僕は自分の皿を凝つた。

まず、僕の目の前に置かれたモノは良しとしよう。普通の和風定食だ。ここは洋風のファミレスだけど。

問題は少女の目の前に置かれたもの、だ。

チヨコレートパフェ、イチゴパフェ、ふむ、ここまでは未だ良いであろう。

さすがにお昼ご飯がダブルパフェはないだろう、とは思ったものの、女性は甘いもの好きっていうのは前に本で読んだ事がある。別段、お昼ご飯を菓子パンやスナック菓子などで済ませるOJや女子

高生が存在する現代の世の中ではなんら不思議な光景では無からう。しかし、しかしだ。

「」の後に、フルーツパフェ、カスタードプリン、チーズケーキ、チョコレートケーキ、ラストにかき氷が僕らのテーブルに舞い降りた時には、さすがの僕も店員に「この席であつてますか？」なんて聞こうと思つてしまつた。いや、聞かなかつたけど、店員もまさにお顔真っ青であつた。

「さて、食べますかー」

なんて、人の気も知らないで、呑気に言う少女。

「…………」

僕はあまりの衝撃で、呆然としてテーブルに鎮座するスイーツ……いや、発音が違うな……正しくはスワイーツの大群を直視するよりほかなかつた。

そんな僕を尻目に、少女の食べるペースは意外や意外、早かつた。某黄色い口だけお化けがドットを食べるスピードと同等、と言つても過言ではない早さでスワイーツを平らげていく。

聞きたくは無かつたが、周囲の客が陰険な笑いを堪える声が勝手に僕の耳に進入してくる。

仕舞には通り過ぎる店員までもが口元を抑える始末。

僕が高校生（自称）で隣りの少女は明らかに小学生にしか見えないからつて、少しば遠慮というものをするべきだ。ていうか死んでください全滅してくださいお願いします。

しかも、である。

僕はおそらく少女の隣りで箸を持つたまま授業中毎日の様に窓から外を見ている時に見かける校舎の一点（女子更衣室）を凝視しているよぼよぼのおじいさん（不法侵入）みたいな表情をしていたに違ひない。

笑われても仕方なし、と割り切るしか他ないのだろう。

やつとの事で僕が自分の食事に手をつけようと我に返つた時には、既に少女はかき氷に手を差し伸ばしていた。

サンマ定食（585円税込）のワカメ万歳な味噌汁の生ぬるい温もりに奇妙な親近感が自然と湧いてくる今日この頃である。非常に悔しいが、隣りに座る少女はさぞかし満足そうな表情である。

ふと窓の外に目を向ける。

相変わらず太陽の光がちりちりとアスファルトを焦がしている。日傘持つてくれば良かつたな、あと、日焼けクリームとビーチボールも、ついでにスルメ焼きてー、なんか無性に。

あ。

そういうえば僕、誰かとともに会話したの久しぶりだな。まあ、でも、全然嬉しくないな……。

初めて見たときから僕は彼女に惹かれていた
どの様に表現すればいいのだろうか
彼女はどん底にいた僕に手を差し伸べてくれた
彼女は僕を見てくれた
彼女だけは僕を見ててくれる

彼女は他の誰とも違う

彼女は特別なんだ

彼女を一目見るだけで

僕は生を実感できる

彼女はとても美しい

穢れのない

純真な瞳

触れたい

彼女に触れてみたい

彼女の吐息を感じたい

彼女を僕だけのものにしたい

彼女は僕にふさわしい

彼女の名前を知りたい

大丈夫

大丈夫だ

僕らはまた会う

絶対に
絶対に

僕らは

彼女は明日もあの場所に来るのだろうか

また出会い

月曜日は億劫だ。

何が悲しくて約八時間も人間版蟻の巣みたいな学校に監禁されなければならないんだ。

僕たちは、いや少なくとも僕は昆虫でもないし爬虫類でもない。いや、ホントに……。

そもそも、なんで僕は学校に通っているんだ？

僕にとつて学校とは丑三つ時に呪われた家で一人で見る呪われたビデオみたいな存在なのに……碎いて言うと死ぬほど嫌いって事だけど。

そんな背筋も凍る様な学び舎に、なぜ？

なぜ、僕はしげしげと惜しげも無く（全然真面目ではないけれど）通つているんだ？

親の様なそうでないような存在（一人）に「行け」（命令）と言われているからか？

それはなくもない。

でも、それはまだ半分。

それとも、勉強をしないと将来が不安で夜も眠れないからか？

それは僕じゃない。

大体、今更、自分にそんなまともな将来が待つてはいるとは到底思えない。

ただ単に学校に行つていれば将来適当な職にありつける、などと思つてはいるからか？

それも僕には当てはまらないと思つけど、大半がそうかもしけない。

それに、僕は再三言つ様だけれど、自分にまともな将来があるな

どと言ふ戯れ言は微塵も消しカスほゞも「ジン」の触覚ほゞも思つていない。

それでは、身震ひするほゞの素敵な出会いを望んでいるのだろうか？

人とうろくに関わろうともしない奴がそんな事を思い浮かべるだけでもう論外。

完全にリングアウト。帰つてください。そしてもう一度と我が家の門をくぐらないでください。

さて、では、どうしてだろうか？

なんで僕は好きでもない学校に通つているんだ？

学校に行つても嫌な事ばかりじゃないか。

友達もいない。勉強も出来ない。クラスは勿論のこと教師からも嫌われている。もはや存在自体が不明。居ない方が良い奴というかもうむしろ生きていらない方が良い奴。

……やっぱり、わからない。

幾ら考えても、残り半分の理由が見つからない。
自分の事なのに自分では分からない。

なんでだろう？

なんでだ？ なんでだ？ なんでだ？ なんでだ？

誰か教えてくれないかな？

誰も教えちゃくれない。

僕は今までそんな優良な人間関係を誰とも築こうとしてこなかつたから、いや、例え築こうとしても相手から願い下げされるのが関の山だらうけど……

考ふる。いや、考ふるな。いやいや考ふる。無いもの総動員で真剣に考ふれば何かしらの答えがぽつりと浮かび上がって来るかもしれない。考ふる考ふる考ふる考ふる考ふる

あーあーーーーー頭痛い……ワレル……

だめだ、分からぬ、ギブアップ、ダウソ。

ワン、ツー、スリー、カンカンカン、挑戦者ーラウンド開始10

秒でスリップ。

そのまま意識不明でチャンピオン初防衛に成功。

「…………霧崎君」

挑戦者、そのまま起き上がりれない！

「…………霧崎君」

チャンピオン、不適な笑みを浮かべています。

「霧崎君！」

「？」

田蓋を開けると、前の席の女の子（三つ編み＆眼鏡）が物凄く迷惑そうにプリントを押し付けてきた。

「…………」

半口開けてかどつかは分からぬけど、一応言ひ訳程度に寝ぼけ眼の惚けた表情をしてみようと努力。

三つ編み眼鏡は依然として眉間にしわを寄せつつ、あからさまに嫌な顔をしている。

仕方が無いのでプリントを受け取るつと手をのばしたら、三つ編み眼鏡は勢い良くプリントを僕の机の上に叩き付けた。

「…………これは、そう、彼女なりの照れ隠しに違いない。

何に照れたのかは知らないが、きっと髪型、おそらく三つ編みの玉の数でもえたのを僕に気がついてもらえないで立腹なだけだ

うづ。

…………相変わらず、自分の考える事は際限なく気持ちが悪いな、
そう思つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7255z/>

ねくら

2011年12月27日22時45分発行